

# きずな

いのち。つながるマガジン

Vol. 1  
2009.3  
創刊号

私はどこからきて、どこへいくのか。



私はどこからきて、どこへいくのか……

# 踏 トレイル 道

自然を歩く、  
古いにしえを歩く、  
自分を歩く

悠久の時の中で、数知れぬ古人たちが踏みしめてきた道。

名もなき人々は何を思い、何処へ向かって歩いていったのだろうか。

歴史と生命あふれるこの道を踏みしめ、今を生きる私たちが歩むべき道を探す旅が始まる…。



## 感じる旅

悠久の歴史と生命あふれる大自然の道、「戸隠古道」。この道を先人たちは何を思い、何処へ向かって歩んだのだろうか。1207年(承元元年)、専修念仏停止により、親鸞は越後の居多ヶ浜(上越市)へ流罪となる。赦免後、京都へは戻らず、念仏の教えがまだ明けやらない関東に伝道の旅へと向かう親鸞もまた、この道を歩んだとされている。

2年後に親鸞の750回目の大遠忌法要を向かえる浄土真宗本願寺派長野教区では、2008年9月27日～28日の2日間にわたって「しんらん踏道(トレイル)」を開催した。全国各地から参加した約30名が、親鸞や先人たちの踏みしめた道を「歩く」体験を通して心と体で感じる旅を満喫した。

## ゆっくり歩く

古道の入口に立つと、秋の色に染まり始めた樹木のトンネルが、まるで私たちを古人の世界へ誘うかのように深い森へと続いている。ゆっくりりと大地を踏みしめる足元からは落ち葉の乾いた音が心地よく響く。本格的な戸隠参道の入口となる一之鳥居から奥社までの約13kmの行程を2日間かけて、思い思いのペースでゆっくりと歩いた。道ゆく私たちを待っていたのは、圧倒的な自然の色彩と、そこに息づく無数の生命。そして、実りの季節を向かえた森のいたるところには、たわわに実った木の実やキノコ…。豊かな自然からの贈り物に、初めて出会った参加者どうしの表情も自然とほころんでいた。

## いのちの安らぎ

自然の恵みを体いっぱい感じながら、



あわただしい日常を離れ、  
 ゆっくりと大地を踏みしめて歩く。  
 そこには今も変わらぬ  
 時の流れと生命があふれている。  
 いつの間にか私たちは  
 いいようのないやすらぎを感じていた。

# トレイル しんらん踏道 ~戸隠古道編~



数知れぬ古人たちが踏みしめたであろう踏道をゆく私たちは、誰しもがいいような不安らぎを感じていた。  
 それは、日常の慌ただしい時を離れ、自然という限らない生命と、途方もない時間の流れの中に身をゆだねること、自分の意思とはまったく無関係に、この命を生かそうとする「何か」に出逢ったからなのだろうか。  
 かつて親鸞や幾多の先人たちもそうであったように、自分の思いをはるかに超えた目に見えないイノチとチカラに導かれ、今を生きる私たちの歩むべき道を探す旅もまた、続いてゆくのかもしれない。

写真提供/栗田昭映

# 死刑

## とメディア

—人は人を殺せる。でも人は人を救いたいと思う—

### 森達也さんとの出会い

映画監督でドキュメンタリー作家の森達也さんと最初に出会ったのは、2006年7月20日、東京で行われた研修会だった。

ここでは、テレビ作品『ドキュメンタリーは嘘をつく』が上映され、続く講演で森さんは「ドキュメンタリーとは、実際にあった事件などの記録を中心として、虚構を加えずに構成された映画・放送番組や活字媒体などをいう。しかし、記録を中心に、虚構を加えず」ということは難しい。映像の場合、企画に始まり放送されるまでの間に、作り手の意志や放送業界の基準・スポンサー・視聴者の要望などが入り込んで伝えられている」

ことを具体的に明らかにされた。

とくに「テレビの嘘は見抜けない」という森さんの言葉は、情報の多くをテレビから得ている私の心に強く残った。その後、森さんには「ころをさなき世界のために—親鸞からまなぶ（地球幼児期）のメソッド—」「いのちの食べかた」などの著作があることも知った。

これらのご縁もあって、2008年のビハークラ講座（8月1日）は、森達也さんに遠路ご出講をいただいた。講演のテーマは、

「死刑について考える—人は人を殺せる。でも人は、人を救いたいと思う—」

### メディアは怖い

森さんの講演は、こんなふうが始まった。「今は東京でも、テロを警戒する意味であらゆる所からゴミ箱が撤去されたり、至る所に監視カメラがつけられ、施設も場内アナウンスで不審者や不審物に注意するよう喚びかけている。『テロ警戒中』とは、誰に伝えているのか？ わけがわからない状態で、とにかくセキュリティ（安全・防犯）だ。きつかけとなったのは、オウムの子供ら事件。これが大きい」。

なぜオウムはサリンを撒いたのか？

捜査を妨がすためか？ 理由がわからないと不安がつるのは必然。テレビも、不安と恐怖をおおったほうが視聴率が上がる。「あぶない」「怖い」といったほうが、みんながチャンネルを合わせてくれることを、メディアはよく知っているのである。

ならば、セキュリティが上がったら、街を安心して歩けるか？ それは逆で、不安と恐怖で他の人を信じられなくなる。悪と自分たちとの違いが欲しいから、メディアは善と悪を二分する。オウム事件の時は「オウムの信者が私と同じでは困る。悪は許せない。死刑にして死んでもらう」というイメージを作り上げた。森さんは「メ

ディアによって状況がむき出しにされた」といい、その状況のエスカレートが怖いという。すなわち、

「メディアは怖い。なぜなら使い方を誤ると、たくさんの人が死ぬ。メディアの情報を何の疑いもなくそのまま受け入れてしまうと、人を殺し、そして自分も殺されることになる状況を呼び寄せてしまう可能性がある。そこまで人間は愚かじゃないって？ でも、それは歴史が証明している。」

（森達也著『世界を信じるためのメソッド』）というわけだ。

### 彼らを死なせたくない

ビハークラ講座と同じ日（8月1日）、森さんには本願寺長野別院の人生講座で講演「報道は何を学んだのか？—松本サリン事件以後のメディアと世論—」を行なっていた。森さんにはオウム真理教のドキュメンタリー映画『A』『A2』がある。

ビハークラ講座の後半は死刑のことに話が及んだが、森さんが死刑について考え、やがて取材を始めたのは、映画『A2』を撮り終えてしばらく過ぎた頃、東京拘置所にいる多くの元オウム幹部たちとのつき合いが始まったことがきっかけだった。「拘置所で面会する元幹部信者たちのす

べてが死刑確定囚なのだ。死刑を考  
えないわけにはいかなかった」という。  
「難しい取材だった」と森さんは振  
り返る。「死刑確定囚は平均7〜8年、  
拘留所において刑の執行を告げられる  
のはその朝。昔は3日くらい前だっ  
たが、自殺があったため変更された」  
「扉があって、そこから入り、立た  
され、上から輪のロープが降りてくる。  
刑務官に目隠しされ、手足をしばられ、  
仏壇があつて…(図示して説明)」「刑  
務官・医務官・教誨師それぞれのつ  
らい役割。とりわけ刑の執行にあた  
つて誰がどのボタンを押したかわか  
らないようになっているとはいえ、  
直接その手を使わなければならない  
刑務官の苦悩は大きい」「内閣府の  
調査で80%が死刑制度に賛成。5%  
が反対。背後にある応報感情」「メ  
ディアも死刑を黙認状態」など、重  
苦しい話がつづいた。

「誰もが生きる価値がある。でも、  
誰かの生きる価値を損ねた人は、自  
ら生きる価値を放棄せざるを得ない  
のか。いのちって何だろう？ 人が  
人を殺すことって？」——切々とつ  
づく森さんの話を先取りしようとする  
自分がいた。つまり、森さんは「死  
刑で人を死なせたたくない」といい  
なのだ。  
「僕は彼らを死なせたたくない。論理  
ではないし情緒でもない。水が低き  
に流れるように、冬が来れば春が来  
るように、昼食を抜けばお腹が空く  
ように、父や母が子供を慈しみ、子  
供が父や母を慕うように、僕は願う。  
彼らの命を救いたい」(森達也著『死  
刑』)

## ズッシリと 重たい課題が残った

死刑制度の存置派は、この刑罰に「犯  
罪抑止力」と「被害者・遺族感情の  
慰撫」を求めている。いわゆる「み  
せしめ」であり、仇討ちの連鎖を断ち  
切るため私的報復が禁止された時代  
における「国家による報復の代行」で、  
「必要悪」という言い分だ。平たくい  
えば、「国家が人のいのちを断ち切る」  
ことであり、技術的には「人(刑務官)  
が人を殺す」ことに変わりなく、こ  
こに刑務官の切実な苦悩があることは、  
森さんの話の中にも詳しく語られて  
いた。

一方、廃止派には「死刑は残虐な  
刑罰にあたり、憲法36条(公務員に  
よる拷問及び残虐な刑罰は、絶対に  
これを禁止する)に違反する」とい  
う意見があるという。1989年、  
国連が死刑廃止条約を採択したもの、  
多分、これと同じような理由からだ  
ったと思う。さらに「この刑罰が執  
行された後、無実が証明されても、  
すでに取り返しはつかない」という  
廃止論は、一般にもよく知られる。  
身近なところでは、真宗大谷派が  
2007年8月31日、8月23日に3  
人の死刑が執行されたことに対し、  
当時の安部晋三首相と鳩山邦夫法相  
に宛てて「死刑執行の停止、死刑廃  
止を求める声明」を送付した。「声  
明は阿弥陀如来の本願に立ち、どの  
ような罪を犯した者でも、たとえ罪  
を反省するに至っていない者でもい  
のちは尊重されなければならないと  
主張。犯罪の凶悪化や被害者遺族の  
感情から死刑執行を求める世論が高  
まっていることに理解を示しながら、  
応報思想では、加害者の反省や被害  
者遺族の悲しみを癒すことは困難だ  
としている」(2007年9月4日  
付「中外日報社ホームページ」)  
ちなみに、死刑制度について、私  
たち本願寺派には公式な見解は、こ  
れまでのところ、ない。

講座を終え「すべてのいのちの尊厳」  
を護ることを目標のひとつとする  
私たちに、ズッシリと重たい課題が  
残った。  
(中島清志)

### 森 達也(もりたつや)

1956年広島県生まれ。  
オウム真理教(アーレフに改称)を内側から描いた  
ドキュメンタリー映画「A」「A2」で知られる。  
著書に「死刑」など。



世界を信じるための  
メソッド  
理論社 ¥1,260



死刑  
朝日出版社  
¥1,680



「夕焼けこやけでく石の鐘のこだまは……」初上映  
2008.6.23~24 「念仏者9条の会」全国大会

今、この映画が反響を呼んでいます。「奥信濃ののどかな夕陽。その風景にそぐわない、石の塊。戦時供出された梵鐘は、戦車に、戦艦に、それとも弾丸になったのだろうか？ 仏教界も呑みこんだ、アジア・太平洋戦争の爪痕。その無言の「石の鐘のこだま」を私たちがどう受け止めたらいいいのか？ そんな思いの中でこの映画は企画された。」（「映画制作への思い」より）

この映画の初上映会が「念仏者9条の会」の全国大会で行われ、全国から集まった約70名の参加者が映画を見た後、実際に石の鐘が吊さされている稱名寺（信濃町）を訪ねて、住職の佐々木五七子さんのお話を聞くなどして、平和への思いをあらたにしました。



「お寺で地球温暖化を考える集い」  
2008.10.10 本願寺長野別院

この研修会は、「お寺で地球温暖化を考える」ことで、私たちが直面している地球規模の問題を身近なところから考えていこうと企画されました。今回は、長年地元で環境問題に取り組んでいる山口長志さん（須坂市）を講師に迎え、約50名の参加者がグループワークなどを行い、今私たちに何ができるかをいっしょに考えました。



## 人権はすべてに優先する

現在ほど「人権」が問われている時代はない。

昨秋遂に、アメリカの「強欲資本主義」新自由主義・市場原理主義」が破綻し、無思慮に追隨してきた日本社会を始め、世界中の雲ゆきが怪しくなってきた。アメリカでは、上位400人の総所得と、底辺に喘ぐ1億5千万人の総所得が同額との報道には、啞然とさせられる。一方、日本の大企業には76兆円ともいわれる内部保留金がありながら、「期間工・派遣切り」「雇い止め」。人のいのちより、「カネ」の方が大切な社会（価値観）の証か？ 「カネ」といえば、金と梵鐘との違いはあるが、昨年製作した、信濃町稱名寺を舞台とした『夕焼けこやけでく石の鐘のこだまは……』（映画）は、教団内より、一般社会の反響が大きかったのは驚き。寺の梵鐘が、人殺しの

為の、銃弾・戦車・戦艦・戦闘機etcの材料に……。

旧ドイツの、ヴァイツゼッカー大統領の「過去の悲惨な歴史を検証し、学ばない者は、今の状況を正しく見ることはできない。（主意）」の言葉は、常に座右に置きたい。いかなる戦争も、最大の人権侵害であることを、忘れてはならないことだ。

私の属する教区社会問題専門委員会は、過去の事実に基づき、現在の社会の具体的問題に関わる事によって、念仏者として「信心の社会性」を問う活動。主な所掌事項として、

- ① 非戦・反戦の取組み（ヤスクニ問題・憲法改定問題を考える）、② いのちの学びと取組み（環境問題・ハンセン病・ビハラ活動）、
- ③ 差別・被差別からの解放（被差別部落問題に自らの存在をかけて関わり、通底する幾多の差別を見抜き、解放し、解放されていく）。

以上、すべて基底に共通するのは「人権」。

仏教は、山川草木を始めとする一切のいのちの尊厳性（いのちの重さと尊さ）への目覚めを説く。それは、自己のいのちへの目覚めはもとより、他のすべてのいのち（一切衆生）への目覚めと、限りなき共感を呼びおこす、いのちの叫び声を聞く世界といえる。「人権」というのは、まさに人間の自己実現、人間らしく生きる可能性を規定したもの」（宮田光雄）その尊厳なるいのちを脅かす存在に対しては、仏教・念仏者として断固とした態度が必要だ。

先日、清泉女学院大学で『臨牀の哲学』講座を依頼され、強制される死のテーマで話をした折、学生から問われた。「あなたにとっての平和とは……」。迷わず応えた。「平和とは、国家権力や、人から、又、私個人に対し、強制・抑圧・疎外・差別、のない社会。つまり、人権がすべてに優先する社会。」（定専寺 松嶋澄雄）

承元の法難800年法要  
2008.10.26 本願寺長野別院



承元の法難から800年の節目を向かえ、命がけで念仏の道を買った親鸞聖人の姿を通して、今を生きる私たちが歩んでいく道をもう一度見つめなおす機縁として法要を勤めました。

20名が「おかみそり」  
2008.10.26 本願寺長野別院



長野教区では毎年、別院の報恩講にあわせて、「帰敬式(おかみそり)」が行われており、今回は20名の方が受式されました。

「帰敬式」は仏の教えに帰依し、仏教徒となるための儀式です。また浄土真宗においては、念仏の教えをよりどころとして生きいくこと誓う場ともいえます。そして、帰敬式を受けて仏教徒となった方は「法名」を名のります。

「法名」は、仏教徒として生きていく上でのあらたな「名のり」であり、すべての法名が仏教をひらいたお釈迦さまの「釋」の1字と、漢字2字から成っています。

あなたも帰敬式を受式しませんか。  
●お問い合わせ●  
本願寺長野別院 ☎026・2322・2621



ビハラー講座・長野別院人生講座  
2008.8.1〜2 本願寺長野別院  
映画監督でドキュメンタリー作家の森達也さんを講師に迎え、『死刑について考えるー人は人を殺せる。でも人は人を救いたいと思うー』(ビハラー講座)と『報道は何を学んだのか?ー松本サリン事件以後のメディアと世論ー』(人生講座)というテーマで講演をしていただき、特別ゲストでお招きした松本サリン事件冤罪被害者である河野義行さんとの対談も行われました。(詳細記事はP4・5に掲載)



キッズサンガーin河東組  
2008.8.4 須坂・普願寺  
「お寺を子供たちの居場所に」を合言葉にキッズサンガーの活動が各地に広がっています。  
キッズサンガーでは、子供たちが心から安らぎ・楽しめる空間を提供することを目指し、それぞれの地域や寺の持ち味を生かした居場所づくりを行っています。  
「キッズサンガーin河東組」では、お寺を1日解放して、ウォークラリーや夏祭り、キャンドルサービスなどを行い、子供も大人も目いっぱい楽しみました。



眞宗ファミリーフェスタ  
2008.10.26 本願寺長野別院

今年から新たに始まったこのイベントは、“家族そろってお寺に来てもらおう”と企画された「家族の日」の進化バージョンです。参加者には、つきたての「お餅」や「きのこ汁」、「綿あめ」がふるまわれ、「チャリティーバザー」では地元で採れた新鮮な野菜や果物、日用品などが格安で販売されました。また、みんなで歌う、「仏教讃歌」のコーナーや、映画「夕焼けこやけで〜石の鐘のこだまは〜」の上映会、子供たちの「念珠づくり」も好評でした。



チェック おすすめBOOKs



YES →  
NO →

やっぱりお金は大切だと思ふあなたには…



『おカネで世界を変える30の方法』  
田中優/合同出版/¥1,365

お金を上手に使えば、社会がよい方向に進むことができる。ということを知りたい人は、ぜひ読んでほしい。だからこの本をたくさんの人に勧めたい。(音楽プロデューサー小林武史)

今世界で何が起きているのを知りたいあなたには…



『DAYS JAPAN』  
広河隆一/デイズジャパン/¥820

「一枚の写真が国家を動かすこともある」テレビや新聞では決して伝えられることのない真実を、世界で活躍する報道写真家たちの目を通して捉えるフォトジャーナリズム月刊誌。

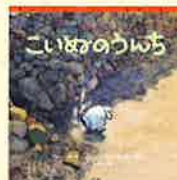
今の世の中に夢や希望を求めているあなたには…



『医師としてできること  
できなかったこと』  
細谷亮太/講談社/¥680

「ひとりの子供を一人の人間としてどこまで大切にできるかが本当は一番大切なことだと思っています」小児がんの治療をライフワークとする医師の珠玉のエッセイ21篇。

命のつながりを求めているあなたには…



『こいぬのうんち』  
絵：チョン・スガワ/平凡社/¥1,575

子犬のうんちは誰からも汚がられ嫌われる。しかし雨に流され土の中にしみこんだうんちは、やがて美しい輪の花を咲かせる。すべての命がつながって、共に生きていることを教えてくれる素敵な絵本。

本当の自分を探しているあなたには…



『ブッタとシツカブッタ』  
小泉吉宏/メディアファクトリー/¥1,000

本当の自分を探して迷えるブタたちのジタバタ劇を描く4コマ漫画。そこから見えてくるのは、私たち人間の悩みの根にあるもの…。このブタはあなた自身です。



『たったひとつのたからもの』  
加藤浩美/文藝春秋/¥1,400

生後1カ月で余命1年と告げられた秋雪くんの6年余りの一生を、105枚の写真とお母さんの文章でつづった思い出のアルバム。



『ドリームボックス』  
小林照幸/毎日新聞社/¥1,600

年間40万匹の犬猫が捨てられ、「ドリームボックス」と呼ばれる殺処分装置に送られている。そこに勤務する獣医師の苦悩を通して、「ペット大国」日本の現実を伝えるドキュメンタリー。



『奇跡のリンゴ』  
石川拓治/幻冬社/¥1,300

「2年も腐らずに赤い色をほのかに残し、甘い香りを放っているリンゴがある…」絶対に不可能と言われながら、農薬も肥料も一切使わずに、奇跡のリンゴを実らせた一人の男の物語。



『ナヌークの贈り物』  
星野道夫/小学館/¥1,460

エスキモーの少年とナヌークと呼ばれるホッキョクグマの出会いを通して見えてくる、命と命の不思議なつながり。故星野道夫の写真と言葉で織られた心ふるえる絵本。



『人間の覚悟』  
五木寛之/新潮新書/¥680

豊かさだけを求めてきた謙(そう)の時代が終わり、世界に響(うつつ)の時代が訪れようとしている今、自らの心の暗闇を見つめて生きる「覚悟」が必要である。

おすすめDVD



【A2】  
監督:森達也/126分/¥5,040-  
株式会社マクザム

「世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい」

森達也が再び退去直前のオウム施設を訪れたドキュメンタリー映画。社会と断絶したはずの信者たちは、地域住民の感情に触れることで、再び社会と向き合い、事件についての葛藤を迫られる。



【いのちの食べかた】

監督:Nikolaus Geyrhalter/  
92分/¥3,990-  
紀伊國屋書店

私達が食べる「食物」が生み出される現場を捉えたドキュメンタリー。野菜や果物はもちろん、家畜や魚までもが効率よく生産され、「いきもの」から「食物」へと変わっていく様子を映し出していく。



【夕焼けこやけで石の鐘のこだまは…】

監督:江守健治/35分/¥2,000-  
スコル社 TEL.026-221-0639

奥信濃のなぜか懐かしい静かな夕陽。その風景に似合わない、石の鐘。

戦争の記憶は薄れつつある今、「石の鐘のこだま」は、あなたにどう響きますか。